

清国初代駐日公使館員と日本女性

侶 紅 娜*

はじめに

中国と日本は1871年の日中修好条規の締結により、正式な国交を開いた。そして、1877年に何如璋(1838-1891)¹をはじめ、清国初代駐日公使団が日本に派遣された。公使館員の多くが科挙試験の合格者であり、例えば公使の何如璋は進士で、参贊官の黄遵憲(1848-1905)²は挙人で、当時一流の文人だといえる。日本の漢学者たちは、これより、中国文人との交流ができるようになることを喜んでいった。一方、当時の中国人も明治維新後の日本に非常に興味を持っていた。しかし、館員たちは日本語が分からず、通訳も不足していた。幸いなことに、当時の日本の知識人は高い漢文の素養を持っていたため、言葉は通じないものの、筆談で意思の疎通ができ、両国の現状や歴史及び文化などさまざまな面で意見を交換した。何如璋と副公使張斯桂(1817-1888)³のほかに、黄遵憲、随員の沈文熒(1838-1880)⁴も日本人と大量の筆談を行った。こうして筆談が盛んに行われ、また筆談に参加した日本側の元高崎藩藩主大河内輝声(1848-1882)⁵や修史局御用係宮島誠一郎(1838-1911)⁶などによってその記録がよく保存されたおかげで、今日まで大量の筆談原稿が残されている。これらの資料は実藤恵秀などの学者たちの整理により、世に出されている。

初代駐日公使館員と日本人との筆談による交流については、かなり研究がある。それらは総じて資料紹介と資料内容を分析する研究に分けられる。資料紹介としては、実藤恵秀氏による大河内の筆談原稿の発見の経緯と資料内容の紹介(さねとう1947-8・1964)、陳捷氏による宮島や岡千仞及び増田

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程修了

¹ 字を子峨といい、広東の生まれである。1868年に進士に合格し、翰林院の各官を歴任した後、1877年に日本へと赴き、初代駐日公使となった。劉雨珍2010参照。

² 字を公度といい、広東の生まれで、1876年に挙人となった。翌年に何如璋に用いられ、駐日公使館の参贊官となった。何に才能を認められ、日常事務から重大な外交問題の処理まで補佐した。公使館において黄遵憲の存在感は大きかった。陳捷2003、鄭海麟2006、劉雨珍2010など参照。

³ 字を魯生といい、浙江省の生まれで、生員の資格は得たものの、それ以上は合格できず、挙人を捐納した。1874年、日本の台湾出兵の際に、随員として台湾に赴き、対日交渉に参加した。1877年に公使館副公使に任命された。陳捷2003、鄭海麟2006、劉雨珍2010など参照。

⁴ 字を梅史といい、浙江省の生まれである。1877年、日本へと派遣され、公使館の随員となった。1879年、喪に服すために帰国し、間もなく亡くなった。沈文熒は公使館の中で地位は高くなかったものの、豪放な性格と優れた文才を持っていたため、日本人に人気があったという。陳捷2003、劉雨珍2010、王韜1985など参照。

⁵ 号を桂閣とよび、また源輝声ともいう。幕末の高崎藩藩主であり、廃藩置県以後は政治から離れ、華族となった。彼は毎日のように公使館に通って、館員たちと筆談をした。さねとう1964、劉雨珍2010など参照。

⁶ 字を栗香、号は養浩堂といい、元米沢藩士である。明治維新後、左院の議官、修史館御用掛、宮内省御用掛などを歴任した。藩閥政府の大久保利通や吉井友実ら薩摩閥と長く親交を保った。劉雨珍2010などを参照。

貢の筆談原稿の収蔵状況などについての紹介がある（陳2003）。内容分析の研究としては、伊原沢周氏が日中外交、文化交流及び朝鮮の革命と開国に両国文人の筆談が及ぼした影響について論じ、筆談に見られる日中両国人の儒教、西洋文化、教育などに対する見解を分析している（伊原2003）。さらに、張偉雄氏は筆談に現れる儒学や漢学の問題などについて分析を行っている（張2004）。

しかし、公使館員と日本人女性との関わりについては、ほとんど研究されておらず、張偉雄氏の論文が唯一の研究である。張氏は筆談記録に散在している女性についての会話文を整理し、沈文燧と黄遵憲が日本人と女性について語った筆談を紹介している。単に文人趣味として女遊びをする沈文燧と儒教的考えを持って女遊びを合理化しようとする黄遵憲を比較し、女性に対して沈文燧は感情的に動くタイプであり、黄遵憲は理性的に動くタイプだと結論付ける（張1998）。張氏の研究は、館員と日本人女性の関わりを研究する唯一の論文として意義はあるが、館員と日本人女性との交流についてのエピソードを紹介するにとどまり、当時の日中両国男性の女性観や妾を置くことを含めた婚姻観の相違といった問題など、文化的背景に踏み込んで分析をしていない。そこで、本稿では張氏の研究を踏まえながら、黄遵憲と沈文燧に焦点を当て、彼らが日本人女性とどのように接触し交流したか、日本人女性をどのように見ていたかを分析し、彼らの理想とする女性像を考察する。

1. 館員たちの活動範囲及び出会った女性

1. 1 活動範囲の確認

東京に赴いた館員たちは、日本の友人とともに多くの場所へ出かけ、東京のほとんどの名所を見物していた。管見の限り、館員たちの活動範囲は、北は北豊島郡の王子村（現在の北区王子町）、南は荏原郡の目黒村（現在の目黒区の北部）、東は葛飾郡の亀戸村、木下川村（現在の江東区）までと、かなり広範に及んでいた。全体から見ると、館員たちは公使館と宮島宅の所在地である麴町はもちろん、そのほか浅草区、南葛飾郡、本所区、下谷区などにもよく行っていたことが分かる。本稿では彼らの活動範囲を、主として友人宅、見物と料理店、社会活動に分けて紹介する。

まず友人宅について見てみよう。公使館を訪ねる日本人は、ほとんどが華族や明治政府の高官などであり、彼らの住居もたいてい景勝地にある立派な屋敷であった。浅草区今戸町（現在は台東区の東部）にあり、隅田川に臨んでいた大河内宅はその一つである。東京第一の名勝地にある大河内宅は四季を通じて眺めがよい上に、大河内は清国文人との交遊を楽しんでいて、よく館員たちを家まで招いたため、公使館以外で最も多く筆談が行われる場所となった。館員たちは大河内宅のほかにも数多くの立派な友人宅を訪ねた。このような立派な友人宅を訪ねることは、館員たちにとって、大きな楽しみであったらう。

「東京の名所を数えるものは、必ず先ず上野と向島とをあげて、一対の勝地とせないものはない。」⁷

⁷ 実業之日本社1914、179頁参照。

と当時の名所案内に書かれていたように、館員たちが一番よく出かけたのは上野と向島とその周辺地域であった。花見の名所として、墨堤、木母寺堤、木下川梅園、堀切村、亀戸村などもよく訪ねた。こうした場所で日本の自然美を味わい、日本人との筆談を楽しんだ。このあたりは風景がよいのはもちろん、料理店もたくさんあった。例えば、向島にある植半や花月楼、そして上野にある八百善や長酩亭などである。このような場所は観光客が多いため、にぎやかで芸者も多かった。そのため芸者を呼ぶのにも便利であったろう。見物の後、眺めがよい料理店で酒を飲んだり、詩を詠んだり、芸者を招いたりするのは文人同士の決まりごとであったろう。

館員たちは風景を楽しむ一方で、身をもって日本社会を体験することも楽しんでいて、教育施設や美術会へ出かけ、伝統的なものと維新後の新しい変化が見える場所を見物した。例えば、教育の面で昌平黉は古い儒学教育の代表で、女子師範大学と跡見学校は女子教育を推進する新しい教育の現場であった。館員たちは黄遵憲を始め、ほとんどが明治維新後の日本社会の変化に関心を持っており、多くの場所を見学することによって見識を深めていったのである。

1. 2 公使館外で出会った女性たち

また、館員たちは数多くの場所で、たくさんの女性に出会った。身分から見れば、主に4種類に分けられる。すなわち、芸者、料理店の店員、友人の妻および女子学生である。この中で最も多かったのは芸者である。芸者は料理店に招かれる時もあり、日本人の邸宅に招かれることもあった。彼女たちは酒を勧めたり、芸をしたりして彼らを楽しませた。料理店の店員には、私娼というべき者もあり、中には公使館に入って館員と一緒に暮らす者もいたようである。また、友人宅を訪ねる時、芸者を呼ぶ場合もあったが、その友人の妻が出て接待することもあった。つまりその場合、彼らは上流社会の女性と接することができたのである。彼らはまた、女子師範学校と跡見学校で新しい教育を受けた女子学生にも会う機会があり、特に黄遵憲は日本の女子教育を高く評価していた。このように多くの女性と接触したことによって、しばしば女性の話題が筆談にのぼるようになった。公使館員たちが日本の女性に対していかなるイメージを持っていたのか、日本人との筆談でのやり取りから見て取ることができる。これについては後述する。

2. 沈文熒と公使館に入ってきた女性たち

館員たちが日本に赴いた時、女性の家族は随行しなかったため、日本女性を雇って身の回りの世話をさせたり、夜の相手をさせたりしていた。沈文熒および黄遵憲等が残した筆談資料の中には、公使館に招き入れられた女性として10人ほどの名前が現れている。まず、沈文熒が招いたのは、お春（当時16歳）、お蝶および中国人の王瑞の3人である。通訳の潘任邦が雇ったのはお楽、通訳の陳子麟が同棲したのはお勝、随員任謙斎が招いたのはお濱、随員寥錫恩が招いたのはお信、そして、黄遵憲が公使館に迎えたのがお常、王治本が迎えたのがお鶴（当時15歳）とお濱で、計10人いた。

2. 1 公使館に入ってきた女性たちについて

これらの女性たちの身分については、確かな記録はないが、大河内は沈文熒に、「日本では、安くて手に入れやすい妾は地獄と言います。王揚斎、王漆園、王琴仙の愛妾はこれです。潘任邦、陳訪仲の妾もこの類いであることを免れません。こうして見れば、あなたたちはみな甘んじて地獄に落ちるのでしょうか。」⁸と言ったことがある。村上信彦氏によれば、「じごく」に「密淫売」という漢字を使っていることから、「じごく」は私娼を指す（村上1972、34頁）。石川鴻斎も沈文熒と同棲するお蝶について、「たぶん山外の妓猫だろう」と言っていた。「猫」は芸妓が三味線（猫の皮を胴張りに用いるから）を使うところから、芸妓の異称である。「山外の妓猫」というのは野良猫の意味で、妓楼の外で働く娼婦のことであり、私娼だと考えられる。

館員たちがどこでこれらの女性たちを雇ったのかは、はっきりとは分からない。しかし、王漆園が雇ったお鶴だけは記録が残っている。大河内から沈文熒への手紙には、「前略 漆園兄弟と相談して見に行きませんか。帰りに、山下の料亭、扇屋で小酌して、そこのお鶴を見ませんか。」⁹という内容が見える。したがって、お鶴は料亭から公使館に迎え入れられたのだろう。ほかの女性もほぼ同様であったと推測される。市場学而郎の『公娼と私娼』には、娼婦たちの告白が大量に載せられている。それらの告白によれば、ほとんどの私娼が飲食店に身売りされ、働きながら体を売っていた（市場1917）。公使館に入ってきた女性も、大体同様の経験を有したであろう。

上述の通り、館員たちはさまざまな場所を訪れたが、彼らは訪れた料理屋等でこれらの女性たちに出会い、公使館に迎え入れたのだろう。館員が彼女たちを妾として認めないのも、彼女らが商売女であるという身分に関係があるのだろう。中国人の考えでは、妾というのは、正妻のように仲人を立て、正式な結婚式がなくとも、一緒に暮らす家族である。滋賀秀三氏は、「妾とは、閨房の伴侶として娶られ、日常生活の上では家族の一員たる地位を認められながら、宗という理念的な秩序のうちには地位を考えられていない女性をいう、と定義することができるであろう。」と述べ、「不正規な家族員」と呼んでいる（滋賀1967、551頁）。前述した沈文熒が迎えたお春や黄遵憲が迎えたお常などは、一時的に金品で雇われ、館員たちの身の回りの世話をし、夜の相手をしたのであり、妾としては認められず、ただの婢に過ぎないのである。沈文熒はお春のことを言うとき、いつも「小婢」という言葉を用いていた。大河内はお春などについて、多くは「愛寵」や「愛姫」などという妾をさす言葉を用いていた。そして、沈文熒はお蝶を公使館に迎えた時、大河内が沈文熒に送った手紙には、お春が来たときと同じく、まるで結婚祝いのような対になるものを贈った記録がある。そこから見れば、大河内はそのような女性たちを館員の妾とみなしていたのであろう。

⁸ 劉雨珍2010、48頁参照。

⁹ さねとう1964、102頁参照。

2. 2 公使館員から見たこれらの女性たち—沈文熒を中心に

館員たちがこの女性たちについてさまざまな不満を持っていたことは、日本人と交わした筆談からうかがえる。特に、お春とお蝶という二人の日本人女性を迎えた沈文熒の場合、のちに堪えられなくなって彼女らをやめさせ、中国人女性の王瑞を公使館に招くまでに至っている。以下、沈文熒がお春とお蝶に抱いた不満について、具体的に見ていきたい。

2. 2. 1 下品なところ

2. 2. 1. 1 慎みがない

お春があまり男女の別を意識していなかったことは、沈文熒の少なからぬ不満を招いたようだ。大河内は筆談を整理した際、筆談当時の様子についても記録している。そこには例えば、「石川鴻斎と梅史を訪ねて筆談をした。お春が裸で横になっていた。」といった記述が見える。商売女といっても、平気で男の前で裸になるのは、沈文熒にとってあまりに常識から外れたことであっただろう。

気軽に男と話す例も少なくない。例えば、「お春は私（大河内）にこうこうと言った。」や「お春はお勝が良い人で、館内一の美人だと言ったが、そうであろうか。」などのようにほかの男性と気軽に話すことは、当時の中国人男性から見れば、慎みのない行動であったといえるだろう。¹⁰

2. 2. 1. 2 生活臭

お春は下層の出身であったため、質素なところが見られる。お春が当たり前だと考えていたことも、沈文熒から見ると生活臭を帯びたものに映った。例えば、お春が自分でタバコを巻いていたことや、誤って買ってしまった弁当箱を返品しようとしたことがある。大河内との筆談から見ると、沈文熒は彼女のこうした行為が気に入らなかったようだ。

お春がタバコを巻くのを見た。

沈文熒 小婢は来たばかりで、まだ何もできないので、笑われるだけです。

大河内 星使は弊国の人材について知りたいなら官僚に聞いたほうがいい。もし女と酒について知りたいなら、私がお話しましょう。貴婢は器用で、素晴らしい。¹¹

このように沈文熒は、お春が自らタバコを巻く姿を大河内に見られて、謙遜したというよりは、おそらく自分の女のみっともないところを見られて、気恥ずかしい思いの方が強かったのであろう。

また誤って買ってしまった弁当箱を返品しようとしたことについては、沈文熒はもっとはっきりと不満を表した。公使館の召し使いが碁盤を買おうとしたところ、間違えて弁当箱を買ってしまった。以下は、お春が大河内にその経緯を話した後の沈文熒と大河内の筆談である。

大河内 この弁当箱は何の役にも立たなくて、返品したらどうですか。たぶんお春はあなた

¹⁰ 劉雨珍2010、30・42頁参照。

¹¹ 同上、28頁参照。

のお金が足りなくなるのを慮って忠告したのでしょう。

沈文熒 お春が家のことを考えてくれるのはありがたいが、すでに買ったものを返品するのは信用を失うでしょう。¹²

このようにお春は下層の出身で、タバコを巻いたり、間違えて買ったものを返品したりする習慣をもっていたのだろう。しかし、沈文熒は文人で、金銭より信用や体面のほうを気にしていたに相違ない。お春にとって普通のことは、沈文熒から見れば、いかにも生活臭を帯び、下品なことであっただろう。

2. 2. 2 金品をねだる

この女性たちはもともと商売女で、金銭目当てで公使館に入ったものと考えられる。つまり、彼女らにとっては、できるだけ多くの金品を手に入れることが重要であった。したがって、彼女たちは給金だけでは満足せず、直接館員に金品をねだったため、館員たちにとって重い負担になったものと考えられる。

この点について、沈文熒は直接不満を洩らしたことはなかったものの、筆談から見て取れるように、お春は彼によく物をねだっていた。以下の筆談を見てみよう。

お春が服を買いに行きたがった。

大河内 貴殿の下女が服を一着買いたがっています。しばらく街へ行くのを許してあげたらどうですか？あなたの恩恵を示すにも足りることと思います。

沈文熒 彼女が街に行きたいのならば、今後私が彼女に買い与えましょう。彼女が行く必要はありません。¹³

また、1878年3月7日の筆談は、以下のようであった。

大河内 潘さんの婢何某（お楽）と貴殿の下女お春が街に出て、陶器類を買いに行きたがっているの、彼女にお金を渡してあげてくださいませんか。¹⁴

ここでは、お金が渡されたかどうかまでは、筆談に記されていないが、お春がしょっちゅう買い物を理由にお金をねだっていたことが窺えるだろう。

沈文熒のもう一人の下女であったお蝶は、お春よりもっとあからさまに金品をねだっていた。お蝶はお春が公使館を去った後に替わって沈文熒に仕えた下女である。しかし、お蝶もやはり、3ヶ月もたたないうちに、公使館を離れた。よく沈文熒と筆談をおこなったもう一人の日本文人である石川英は、大河内輝声宛の手紙に、お蝶が公使館から去って、また新しく人が来たことを書いている。その時、石川は大河内とともに沈文熒を訪ねて詳しいことを尋ねたところ、沈文熒は「お蝶は毎日のように金品をねだるので、いやになってしまいました。ですので、もう一人広東の王瑞という下女を招い

¹² 同上、30頁参照。

¹³ 同上、31頁参照。

¹⁴ 同上、33頁参照。

て、お茶を入れさせたり、掃除をさせたりしようと思います。』¹⁵と言ったという。

沈文熒はお春やお蝶が金品目当てで公使館に来たことはよく分かっていただろうが、このようにしょっちゅう金品をねだられたのでは、さすがに彼も失望したことだろう。一方、大河内はこれに対し、いつも金品を与えればよいのではないかと沈文熒に勧めていた。前述の通り、大河内はこれらの女性たちを館員たちの妾と見なしていたのである。そうであれば、妾に金品を与えるのは当然のことだと大河内は思ったことだろう。もっとも大河内にとって、沈文熒の気に懸っていたのがお金の問題だけではなかったことは、知る由もなかっただろう。

2. 2. 3 出歩く

周知の通り、伝統的な中国人の考え方によれば、女性は家の奥に居るべきで、出かけることは簡単には許されなかった。しかし、筆談内容から窺えるように、公使館の日本女性たちは、ある程度自由に外出することができた。筆談にはしょっちゅう女性たちが買い物に行ったり、お風呂に行ったりする記述が見られる。ただし、前もって許可を得る必要があって、館員たちはこうした外出の申し出に、あまり喜んでいなかったものと推測される。

上述の通り、お春は服を新調するために街へ出かけたが、沈文熒は買ってあげるから行かなくてもよいと大河内に語っていた。沈文熒はお春の外出を必要ないものと考え、大河内の勧めにもかかわらず、許可しなかった。

また、以下の筆談から分かるように、お春は沈文熒が病床に臥していたにもかかわらず、いつも通りほかの女性たちとお風呂に出かけたことがあった。

大河内 前日の宴会では、盛大な宴席の最中、あなたが来ていないことを心配しないものはいませんでした。最近、履詳号へいって、琴仙、七月に会い、そこであなたの病が治ったかどうかを尋ねました。私はすごく悩んで、車でかけつけ、治ったかどうかお見舞いにやってきました。今、館内には誰もいなくて、お春もいないようです。なんと興ざめなことでしょうか！

沈文熒 館員はみな出かけました。雇った下女たちもこぞってお風呂に出かけました。私は一人で横になって、薬が暖まるのを待っていましたら、足音が聞こえ起きあがったところです。お見舞いしていただき、感謝に堪えません。¹⁶

日本人の入浴の習慣は、当時の中国人にとって、理解しがたいことであっただろう。ぎゃくに日本人にとって、入浴できないことは、耐えがたいことであつたにちがいない。沈文熒が病気にかかったといっても、風呂に行くぐらいは大丈夫だとお春は思ったのではないだろうか。しかし、中国の伝統的

¹⁵ 同上、209頁参照。

¹⁶ 同上、80頁参照。

な家庭についての観念では、妻であろうと、妾であろうと、婢であろうと、一切の行動は主人を中心にしなければならない。普段もそうであるが、何かあったときにはなおさらである。こうした中国の観念に照らせば、お春が看病もせずに風呂へと出かけことは、当然に沈文熒の不满を招いたことだろう。

2. 2. 4 その他

以上のほかに、お春が公使館を離れたときの筆談を見てみよう。

この日お春が居なくなっていた。すでに追い出されたと聞いた。

大河内 姫君はもう追い出されたと聞いたが、何か悪いところがあったのですか？李斯の諫めも間に合わなかったようですね。

沈文熒 お春はよく私に戯れるので、書を書いたり、詩を作ったりできなくなってしまいました。言っても聞かないので、彼女を行かせました。お春は去って、お蝶がくるでしょう。¹⁷

お春は当時まだ16歳であった。これは年が若いゆえの子供っぽい行為であったのか、あるいは沈文熒の機嫌をとるための行為であったのかは分からない。しかし、いずれにせよ沈文熒に嫌われることになってしまったのだろう。おとなしく男性の言うことを聞くのが女性の徳だと沈文熒は思ったのだろうか。

次は、お春が沈文熒のもとを去った後、彼が大河内の旧臣松井強哉と交わした筆談である。

強哉 お聞きしたところでは、お春が追い出されたのではないですか！またどうしてでしょうか。わたしが思うに、彼女と気持ちが離れてしまったのですか。

沈文熒 お春は幼くて、私に戯れることが好きでした。ですので、帰らせようと思いましたが。思いがけないことに、彼女はさっさと自分で帰ってしまいました。お春が去ってお蝶がやってきます。お春が軽々しく帰ったことを後悔しましたが、もはや間に合いません。¹⁸

沈文熒から見れば、お春が何の未練もなく帰ってしまったのは彼の体面にかかわることだっただろう。そのため、第三者にはお春を追い出したと言っていたのではないか。

2. 3 沈文熒の理想的な女性像

筆談からも分かるように、沈文熒が館員の中でいちばん女色にとらわれていたようである。筆談の内容によれば、中国にいたときも、彼は数多くの妓女と親しい関係を持っていたようで、その経験に

¹⁷ 同上、156頁参照。

¹⁸ 同上、156頁参照。

基づき、『薄倅詩名妓伝』という詩集を著している。¹⁹また中国の妓女について、沈文熒が大河内との間に交わした筆談に、妓女には、芸によって身を立てる上品なものと、実際のことばかりにこだわる下品なものがあると言っている。それでは、いわゆる上品なものとは、どのような妓女たちであっただろう。それは、沈文熒が詠んだ『紅豆蔻軒薄倅詩』からうかがえるだろう。

2. 3. 1 『紅豆蔻軒薄倅詩』に描かれた妓女たち

この『紅豆蔻軒薄倅詩』（以下『薄倅詩』と省略する）は王韜の筆記小説集『淞濱瑣話』の中に収められている詩集である。この詩集の作者は、後述の通り、沈文熒と見て疑いない。『淞濱瑣話』によれば、『薄倅詩』の作者は友人の箐江詞客であるという。また、『薄倅詩』に箐江詞客に関する記述が沈文熒の経験と一致しているうえに、「箐江」は沈文熒の出身地である余姚を流れる川を指す。経験の一致というのは、箐江詞客が従軍したことがあると言う記述である。沈文熒は実際に1865年に陝西で従軍したことがあった。王韜によると、彼は日本にいたとき公使館でこの箐江詞客に会ったという。²⁰二人は旧知のように意気投合し、沈文熒が詠んだ『薄倅詩』に解釈を加えて『淞濱瑣話』に収録した。そのため、『薄倅詩』が筆談に現れた『薄倅詩名妓伝』を指すものと推測される。そのため、『薄倅詩』から沈文熒の女性に対する考えをうかがえるだろう（王1985、張2009）。

『薄倅詩』では、沈文熒が自ら親しくなった30人近くの妓女を紹介している。ここでは、とりわけ沈文熒と親しかった三人の妓女を取り上げて紹介しようと思う。沈文熒のこの三人の妓女への評価を通じて、沈文熒の理想的な女性像を検討していきたい。

まずは董月喜という妓女のことを見てみよう。沈文熒の描写によると、董月喜は顔だちが美しく清らかであった。彼女の歌声は人をうっとりさせさせた。沈文熒は彼女を妓楼から連れ出すことまで考えたが、さまざまな事情でできなかった。沈文熒と離れた後は、他のものが大金を出そうとしたにもかかわらず、夜の相手をするのを断った。しかも、ずっと沈文熒の行方を尋ねていたという。董月喜のために書いた詩は、以下のようなものであった。

当時春色等閑看、別後相思夢見難。千古多情千古恨、莫教花影到闌珊。

一緒にいて楽しかったときはその大切さに気付いていなかった。離れた後はお互い恋しかったものの夢で会うことも難しかった。古来、情が多ければ恨むことも多い。花を衰えさせないでください。

この詩より沈文熒が董月喜に寄せる恋しい気持ちと一緒にいられない悔しい気持ちを読み取ることができるだろう。

次に宮小婷という妓女について見てみよう。沈文熒が描いた宮小婷はみやびやかで、飾り気のない

¹⁹ 同上、22、23頁参照。

²⁰ 王韜が1879年4月から8月まで、日本を遊歴した。沈文熒が1877年から1879年末まで公使館に務めた。

女性であった。画も描き琴も弾け、とりわけ簫という楽器に長じていた。沈文熒が訪ねると、書を書いたり、画を描いたり、自分が所蔵する有名な書画を出しては、沈文熒の評価を求めたりした。別れを告げられるとがっかりして、泣きながら遠くまで見送った。沈文熒はあまりお金を与えなかったが、優しくされて楽しい時間をすごした。宮小婷のために詠んだ詩は、以下の通りであった。

別涙斑斑雜酒痕、遠情深恨兩無言。一帆送我寒潮去、夢入煙皋有斷魂。

別れる時、顔に涙と酒の痕が混じっていた。別れるのがつらくて、二人は向かい合って無言のままであった。悲しいことに、あなたのところから離れるのが最後、戻れるのは夢だけである。

このように沈文熒は、彼女のことを思うと恋しくてならなかったのである。沈文熒と親しかった時間が一番長かったのは宮小婷である。宮小婷のように美しく、芸に優れ、学問もでき、情を重んじる妓女は、沈文熒にとって、ありがたかったことであろう。

最後に、褚金福という妓女のことである。彼女が金銭を惜しまない性格で、義侠心のある妓女でもあった。長い間、貧しい沈文熒を引き取って世話をした。沈文熒と詩を論じるのが好きであった。沈文熒がいる間は、ほかの富者に招かれても応じなかった。彼女もまた沈文熒と離れるときは、知己がいなくなるといい、悲しんでいた。褚金福のために書いた詩は、以下のようなものであった。

絶代風姿艶若花、窮途青眼愧相加。美人心性才人骨、每夕談詩到月斜。

可憐俠義出紅妝、偏解憐才有別腸。贈我瑯函猶在篋、挑灯展閱倍神傷。

絶世の容姿で、花のように美しい人である。お金もない私に青眼を加えられたのは心苦しい。

彼女は美しい風貌で、才人の気骨である。毎晩、月が傾くまでともに詩を論じていた。女には惜しいくらい義侠心がある。彼女がくれた手紙を読むたびに、悲しくて心が痛む。

このように二人の関係は、美しい妓女が貧しい文人を招き入れて世話をする、というものであった。互いに知己と見え、純粋な恋心で付き合っていたのだろう。ありふれた才子佳人の話のようでもあるが、沈文熒にとっては、中国文人一般がそうであったように、こうした金銭に基づかない男女関係こそが理想的なものであっただろう。

以上、沈文熒と親しい三人の妓女を見てきた。これを前述した沈文熒が公使館の女性たちに抱いた不満とあわせて考えてみるならば、これらの女性たちの優れているところは以下のものであっただろう。すなわち、まず芸技に優れていること、次に詩を解すること、最後に金品にこだわらなく、情を重んじること、である。『薄倖詩』に現れるほかの妓女もおよそこの中のいずれか、あるいはすべての要素を備えるものであった。つまり、このような女性こそが沈文熒にとっての理想的な女性であったと言えるだろう。

2. 3. 2. 芸技について

妓女と彼女たちの芸技について、斎藤茂氏は「散楽などの芸能や宋代以降の芝居のように、妓女の

芸技は時代によってさまざまな内容が含まれたが、その基本となるものは歌舞奏楽であろう。……一般に歌舞奏楽の巧みな妓女は、其れが大きな価値となって、献上されたり購われたりして、宮中や有力者の元に来ることが多かった」と述べる（斎藤2000、43-4頁）。芸技に優れた妓女が人気を博したことがうかがえる。

沈文燧も歌舞奏楽に得意な妓女に対する称賛を惜しまなかった。上述のほか、沈文燧は舞いに長じたものや芝居のできるものなどについて、少なからぬ妓女を詩に詠んでいる。これらの妓女は歌舞奏楽やほかの芸技を有し、沈文燧のような文人の相手となり、彼らもそうした妓女たちを喜んでいて。筆談には、お春やお蝶の芸技についてあまり触れることはなかった。お春やお蝶のような私娼は、たとえ何かの芸技ができたとしても、沈文燧を喜ばせるような芸技ではなかったであろう。

2. 3. 3. 学問について

斎藤茂氏はさらに、「唐代中期以降、妓女がいわば職能として文学に対する理解力を持ち（妻は一般には、文学的な教養は必要とされなかった）、上述のように士大夫たちとの詩文を通じた精神的な交流が日常化される状況となった」と述べる（斎藤2000、127頁）。このように妓女たちは、文人たちの相手となるため、文学とりわけ詩に対する理解力が要求されていた。文人同士で学問を論じるのは一種の楽しみであったが、美女と詩を論じるのも文人にとって欠かせない楽しみであった。

沈文燧にとっても、妓女が詩を解するのも大きなポイントとなる。『薄倖詩』には、前述の沈文燧と詩を論じた褚金福のような妓女も少なくなければ、詞が書ける妓女も少なくなかった。沈文燧はこうした妓女たちと学問を論じたり、彼女たちが書いた詩を評したりしながら、美女と学問を併せて楽しんでいたのだろう。女子は才能がないのが徳だという当時の中国社会において、妓女だけがそのような制限を受けなかったと言えよう。そのため、文人にとっては、一般の女性よりむしろ妓女の方が精神的な交流のできる相手となりやすかった。それに対し、お春は精神的な交流ができるどころか、沈文燧が詩や書を書く邪魔までしていた。お春は沈文燧の求める女性のあり方とはかなりかけ離れていたと言わざるをえない。

2. 3. 4 金品と情について

明末の衛泳が編纂した文人趣味の教科書である『枕中秘』に収められている『悦容編』の序には、次のような内容が書かれている。「情の一字によって、人を生きながら死なせることもできるし、死んで生きさせることもできる。だから、忠臣孝子、義士節婦は、みな大いなる有情の人である。」（大木2006、137頁）ここから見て取れるように、大抵中国の文人は情を重んじている。つまり、情を重んじる女性が、文人の恋愛の対象となりうるということである。

沈文燧の『薄倖詩』には、褚金福のような沈文燧に金銭を求めないだけでなく、むしろ自分から金銭を出してまで沈文燧の世話をしようとした妓女が何人も描かれていた。これらの妓女たちは必ず

しも金銭を必要としていなかったわけではないだろうが、沈文熒に好意的な感情を持っていたため、沈文熒に金銭を求めなかったものと考えられる。お春やお蝶に金銭をねだられるのは、沈文熒から見れば、お春とお蝶が自分に情を持ってない証拠である。沈文熒は金品を出すのを嫌ったというより、むしろ金品で関係を維持するのを嫌ったというほうがより正鵠を得ていよう。また、これらの妓女が泣きながら沈文熒を送別したのとは異なり、お春は何の未練もなく一人で帰っていった。このこともまた、沈文熒にとっては冷淡なことと感じさせられたであろう。

以上の通り、沈文熒にとっては、三つの要素－情、芸技、学問－を満たすのが理想とする女性であったとあってよいだろう。前述の通り、沈文熒が公使館に迎えた女性は比較的下層の商売女であった。一方、中国で交際したのは、ほとんどが上層の妓女であった。もともと、沈文熒が日本の私娼に中国の教養のある妓女の風情を求めるのは無理な要求である。中国下層の女性もお春と同じく、一人で出歩いたり、あまり男女別の意識を有していなかったりすると考えられる。沈文熒がお春やお蝶にこのようなところに不満を感じたのは、お春やお蝶は公使館に入る以上、一時的に雇ったにすぎないのに、既に私娼ではなく、自分の「婢」になっていたからである。自分の「婢」であるからには、きちんと自分の要求通りに行動してほしいのではないか。

3. 黄遵憲の女性認識

前章では沈文熒の理想的な女性像について分析してきた。この当時、沈文熒とともに公使館に勤務していた人物に、先述の通り、黄遵憲がいる。黄遵憲は沈文熒と女性について談ずることが多く、沈文熒が軽率に女性と付き合うことをからかうような発言をよくしていた。また、黄遵憲自身も、筆談で自らの求めるタイプの女性像をよく描いていた。本章ではこれらの筆談記録を通じて、黄遵憲の女性観を検討してみたい。

3. 1 妾に関する黄遵憲と日本人とのやり取り

黄遵憲は1865年、つまり18歳のとき、祖母李氏²¹が生前に選んだ結婚相手であり、またいこでもあった葉氏と結婚した。結婚してから日本に渡るまで、黄遵憲は中国で妾を置いたことがない。張偉雄氏は、黄遵憲は中国にいたときあまり女色に興味を持っていなかったとの解釈を示している。²²しかし、黄遵憲は必ずしも女色に興味がないわけではなかった。妾を置かなかった理由として、以下の3点が考えられる。一つは太平軍の叛乱で家が落ちぶれ始めていたことである。もう一つは、1876年に拳人

²¹ 黄遵憲は祖母李氏の手によって育てられた。75歳の高齢にもかかわらず、黄遵憲の世話なら、何でも自らしたという。（「拜曾祖母李太夫人墓」陳錚2005、114、115頁参照）

²² 張偉雄1998、22頁参照。張偉雄氏は黄遵憲自ら筆談に「弟生来未嘗遊花柳地」といったことを根拠として判断を下した。しかし、筆談に黄遵憲は上海で朱素蘭という妓女と親しいことがあったという記録がある（劉雨珍2010、38頁）。そこから見れば、黄遵憲は女色に興味がないわけではないのであろう。

になるまで、ずっと科挙試験の準備に取り組んでいたことである。最後は、妻の葉氏と仲睦まじかったことである。これより黄遵憲が中国にいたとき、妾を置くことなど考えていなかったのではないかと推測される。

3. 1. 1. 大河内輝声とのやり取り

筆談記録から見れば、黄遵憲は日本へ来てから、金銭と時間などの余裕ができ、妾を娶ることを考え始めた。以下は黄遵憲が大河内に日本で妾を置くことについて詳しく尋ねた筆談である。

黄遵憲 日本では、正妻と妾との礼儀はどのように違いますか。正妻は妾に対して、どのような礼がありますか。

大河内 弊邦では礼儀が大いに廃れ、昔とは異なっています。ですから、現在目にしたところから礼法がないと責めないでください。

黄遵憲 もし今、妾を娶るならば、士族はそれを許しますか。

大河内 四海の内皆兄弟です。これを許さないものはいないでしょう。

黄遵憲 その妾のご両親には、どんな礼儀がありますか。

大河内 寥君の妾は士族の出身だそうです。彼女のご両親に聞いたらどうですか。

黄遵憲 それはごもっともです。今、士大夫（士族）で娘が人の妾になることがありますか。

大河内 もし認められれば、あなたは妾を娶りたいですか。

黄遵憲 私は借りるのではなく、娶りたいです。詳しくお話しください。

大河内 妾を買うより、妻を娶ったほうがいいです。

黄遵憲 妾を買いたいといっても、士大夫のむすめを妾にしたいので、買うといえないのであれば、妾を娶ると言ってもよいです。

大河内 およそ弊邦の士大夫の風習は、富裕で志の高いものは、むすめを人の妾とはさせません。貧しくて見識の低いものは、それを許します。もし女性を求めるならば、良家のむすめをえらんで正妻とするのがよいです。でも、あなたは故郷の「獅子吼（妻が怒ること）」を憚ることでしょう。

黄遵憲 弊邦では妻がいてまた妻を娶ることはできません。ただ南方には、「二妻（二人の妻）」ということがあって、その尊卑の礼はあまり異ならないので、士大夫のむすめでも妻にすることができます。私がさきほど正妻と妾との礼儀の違いをおたずねしたのはこのためです。もし貴国の礼儀もそれほど変わらないのであれば、できないことはないはずですが。敢えてお尋ねしますが、一人が二人の妻を娶ることはできますか。

大河内 弊邦の妻と妾との礼は、いま、君と臣、主と婢との礼のようで、一人が数人の妾を持つものもいます。英雄豪傑ならできないことはないです。

黄遵憲 もし妾を買うなら、どんな家から買うのですか。大体いくらですか。

大河内 私はちかごろ「買妾論」を書いて、あなたにお見せしたいと思っています。原稿は半分ほどできあがりました。この一、二日のうちに清書して進呈いたします。詳しいことはこれを読めばおわかりになります。

黄遵憲 急いでこれをお聞きしたいです。先に大体のことをお教えてください。

大河内 どのような家でも構いません。予約金は大体数百円で、これを整具金といい、その家の家具や身支度にあてます。

黄遵憲 この整具金は両親が受け取るのではないですか。買った以上、他日中国に連れ帰ることもできるでしょう。ですので、借りるのではなく買いたいのです。

大河内 故郷には奥さんがいると思いますが、なぜこのようなことを言うのですか。

黄遵憲 弊所では、妻一人、妾十数人がいることも、別に不思議な話ではありません。²³

以上の会話から分かるように、黄遵憲はほかの館員のように一時的に女性を雇うのではなく、きちんと妾として娶りたい、という考えを持っていた。しかも、気に入った人を娶ることができれば、中国に連れ帰ることまで考えていた。連れ帰って一緒に暮らすつもりであったため、普通の女性あるいはお春のような出身のよくない女性ではなく、士族の娘を娶りたい、と考えたのであろう。黄遵憲自身は中国では最も上層に位置する士大夫層であったため、中国の士大夫に相当する日本の士族の娘なら、自らの妾とするのに相応しいと考えていたのではないか。

黄遵憲の相談に対する大河内の態度は興味深いものである。最初に、黄遵憲に士族の娘を妾にすることができるかどうか、と尋ねられた際、冗談半分に「四海の内皆兄弟です。これを許さないものはいないでしょう。」と答えていた。しかし、会話が進むにつれ、黄遵憲が真剣にこのことを考えているのに気づくと、大河内の態度も変わった。「富裕で志の高いものは、むすめを人の妾とはさせません。貧しくて見識の低いものは、それを許します。もし女性を求めるならば、良家のむすめをえらんで正妻とするのがよいです」とたいへん真剣に答えている。また一人が数人の妾を持つことはできないこともない、とは言ったものの、黄遵憲が中国に連れ帰ることまで考えていることを知ると、故郷に妻がいるのに、そのようなことはやめたほうがよい、といわんばかりでもあった。

この話はうやむやに終わってしまったが、一ヵ月後の筆談に、黄遵憲はもう一度次のような話を持ち出した。以下は黄遵憲と漢学者石川英、大河内との筆談である。

黄遵憲 東京に、剣道ができる女性がいますか。男性のように豪気のある女性がいますか。

漢文に通じる女性がいますか。三つが全部揃っていれば、美醜老若は問わないので、私に紹介してもらえますか。

石川 剣道ができて、詩文に長じる女性にはいるが、多くはないです。みな箱入り娘で、あまり外には出ません。たいていは華族や士族や金持ちの娘です。柳橋、今

²³ 劉雨珍2010、112 113頁参照。

春などにいる芸妓は、容貌だけあって、少し楽器ができるが、言うほどのことはありません。

黄遵憲 華族や士族の娘は、人の妾になることを欲しません。どうでしょうか。

大河内 そのような女性を妾にしたいと思っても、断らなければなりません。なぜでしょうか。女子が剣道をすれば、筋肉が発達して、手足が男性のようになってしまいます。読書をし文章を書く女性は生意気で、議論や弁舌をあてにします。また豪気があるなら、夫は従属させられてしまうかもしれません。素直でおとなしい女性を選んで、これと契を結び、ずっと一緒に暮らすのがよいですよ。

黄遵憲 もし私に及ばないなら、私が彼女を奴隷にします。もし私に勝るなら、頭を下げて負けを認め、彼女の奴隷になります。何も惜しいことはないです。²⁴

以上の会話では冗談を混じえながらも、黄遵憲ははっきりと自らの求める女性のタイプを描き出している。すなわち、彼が求める理想の女性像とは、外見や年齢に関係なく、豪気があり、また自分と精神的交流ができるような教養のある女性であった。黄遵憲が女性の奴隷になってもいい、と言ったのはもちろん冗談であったと考えられるが、しかしそこには一抹の本音も込められていたのではないか。黄遵憲はもともと家庭内で最も権威を持っていた祖母の手によって育てられ、身の回りの世話も、初歩的な学問も、婚姻もすべて祖母に頼っていた。このような黄遵憲にとって、女子は「才なきが徳」という観念はあまりなかったのであろう。また彼は日本に来て以降、西洋文明に大きな影響を受けた日本知識人と交流し、特に女子教育に力を注いだ中村正直との交流があった。こうした交流がまた黄遵憲の女性認識に影響を与えたのだらう。

3. 1. 2 宮島誠一郎とのやり取り

次に、同じく妾を娶ることについて、黄遵憲と宮島誠一郎との間に行われた筆談を見てみよう。

黄遵憲 青山季卿（青山延寿）は日光山を見物したとき、馬から落ちて背中を怪我して、まだ帰っていないと聞きましたが、本当ですか。

宮島 家に帰ったが、まだ治っていないとちかごろ聞きました。

黄遵憲 その二人の娘さんも山にお父さんの見舞いに行ったそうですね。その長女は漢文に通じ、青山さんにとっては頼り合って生きている間柄でしょうが、二女もなかなかいいですね。

宮島 青山さんは娘に恵まれていますね。娘たちは文学に通じ、しかも度々あなたたちに誉められ、とても評判を上げていますね。

黄遵憲 私は東京でよい家の娘を妾としてもらいたいのですが、あなたは斡旋してください

²⁴ 同上、125頁参照。

ますか。

宮島 昨晚、私は新橋の酒楼に行った時、竹という芸者があなたのことをしきりに口にしていた。何もいい家の娘でなければならぬ必要はないでしょう。

黄遵憲 私は以前扇面に書いて新橋にのこしたことがあります。新橋にはまだお万という芸者がいて、二十歳ぐらいの年で、振る舞いが上品で、私も気に入りました。しかし、私は妾を娶りたいので、芸者はほしくありません。良家の子女はあえて外国人に嫁いで妾となりますか。

宮島 普通の良家の子女は外国人に嫁ぐことが許されません。それにあなたは任期が終わって帰国すれば、彼女を捨てるだけでしょう。

黄遵憲 連れて帰るつもりです。

宮島 お宅には正妻がいて、貞淑を守ってあなたが帰るのを待っています。外国で妾を娶ったら、奥さんはあなたのことをどう思うのでしょうか。やめなさい、やめなさい。²⁵

黄遵憲は青山の家を訪ねた際、初めて青山の娘に会った。その後、館員たちが中村正直の主宰していた東京女子師範学校を見学したとき、学生である青山の娘と再会した。黄遵憲の女子師範学校の学生を詠んだ詩から見れば、黄遵憲は彼女らを非常に気に入ったことが分かる。また、青山は元水戸藩士で、儒学者、史学者である。また父の延子も兄の延光も著名な儒学者という学者の家柄である。黄遵憲が気に入った青山の長女青山千代は、婦人運動家山川菊栄の母である。山川が書き上げた母の伝記『武家の女性』によると、当時の水戸では、女は学問に縁がないが、千代は幼いときから兄と一緒に父の青山延寿から漢文を教わっていたという（日本歴史学会1981、山川菊栄1984）。また漢文の素養が深いことに加え、女子師範学校で西洋の学問や中国の女徳を勉強していた。²⁶ 彼女は黄遵憲が求めた精神的な交流のできる相手として相応しい女性であったといえよう。

宮島が芸者を進めたことに対し、黄遵憲は妾を娶りたいため、芸者は相応しくないと言った。一時的な遊びならば芸者より相応しい相手はいないだろうが、長く一緒に生活する相手ならば教養のあるよい家柄の娘を娶りたい、という黄遵憲の考えがここにはあったのではないだろうか。

黄遵憲の相談に対し、宮島はやめるように勧めた。宮島から見れば、故郷に妻がいるため、一時的に遊ぶのなら問題はないが、日本から妾を連れて帰るのは適当ではなかった。ここには西洋の一夫一婦制の影響が見られるだろう。

前述の通り、黄遵憲が妾を娶ることについて、大河内と宮島の考えは一致している。すなわち、中国に妻がいるため、一時的に芸者と遊ぶのは構わないが、妾として娶り、中国に連れ帰るのはやめたほうがよい、ということであった。これに対し、黄遵憲は中国では妾を十数人置いているものも珍し

²⁵ 同上、464頁参照。

²⁶ 陳錚2005、24頁参照。

くない、と述べていた。明治時代、日本ではすでに西洋の一夫一婦制の観念を受け入れ始めていたのに対し、同時期の中国では依然として妾を置くことが当然視され、一夫多妻制が道徳に反するものとして意識され始めるようになるにはもう少し時間を待たなければならなかった。

黄遵憲は当時の一般の士大夫とは異なり、外国の事情を理解するのに熱心で、日本に滞在していた間に、積極的に明治維新後の日本社会の変化に目を向け、男女関係にも比較的新しい考え方を有し、そのため特に教育の面では男女の差別を批判していた。しかし、なぜ妾を娶ることを当然のこととし、その不合理性を感じなかったのであろうか。この点について考えるべく、当時の中国社会における妾を置く習俗について見ておこう。

3. 2 当時の中国人の妾を置くことについての考え方

中国の妾を置く習俗は、清朝まで続く長い歴史を有している。妾を娶るのは男にとって当然のことだという考えは、当時の中国の人々に根強く存在していた。妾の存在が合理的だと思われる理由はさまざまであるが、その中の三つを取り上げて紹介したい。

最も堂々とした理由は後嗣を残すためである。儒教的倫理道徳から見れば、後嗣を残すのは婚姻の最も大きな目的である。「不孝有三、無後為大（不孝には三つがある。後嗣がないのが最大のものである。）」（『孟子』離婁篇）という観念の下、法律上でも道徳上でも、男系の血筋を延長拡大するために妾を置くことが認められており、それはむしろ奨励されているほどであった。

次に妾及びその数は、地位と経済力の象徴と見なされていた。妾を娶るのは男性にとってありふれたこととは言っても、男性が誰でも妾を置けるわけではなかった。妾を置くには経済力による支えが必要なため、妾は男性の地位と財力を誇示する道具ともなっていた。

最後に、伝統的な中国の婚姻は、「父母之命、媒酌之言（父母の命令、媒酌の言葉）」によって決められ、婚姻当事者には結婚相手を選ぶ権利がなかった。しかし、妾はほとんど男性自らの好みで選ぶことができたため、男性にとってはありがたいことであっただろう。前述のように黄遵憲の婚姻は祖母の李氏によって決められ、自ら結婚相手を選ぶことができなかった。妾をもらいたいのは、ある程度、自らの好みで女性を探したい、という思いがあったからではないかと考えられる。

上述の理由から、当時の中国の人々は妾を置くことを何ら恥ずかしいことと思っていなかった。黄遵憲の妾を選ぶ条件が厳しかったところから見れば、彼は見栄を張ることと自らの好みで女性を選ぶことがその大きな理由であっただろう。しかし、黄遵憲は妾の容姿や数ではなく、妾の上品さというところで見栄を張ろうとしたのであろう。黄遵憲は伝統的儒教の倫理道徳を身に付け、妾を置くことを当然のこととして考える環境の中で育てられていたため、西洋の文明に接触しても、そのような考えは容易に変わることはなかったであろう。

3. 3 明治初期日本の妾議論

大河内と宮島は黄遵憲が日本で妾を娶ることに否定的であった。大河内自らの話によれば、彼は数多くの芸者と親しく、酒と女性にはまっていた大河内に不満を持った妻と離婚した経験もある。しかし彼は、妾を養うことはなかった。宮島の場合も、芸者遊びはしたが、妾を置くことはなかった。この二人も黄遵憲と同じように儒教の教養が深いが、なぜ黄遵憲との間に妾についてこのように意見が食い違っていたのだろうか。そこで、当時の日本の妾についての考え方を見てみたい。

明治初期の日本では、西洋文明の影響を受け、多くの人が廃妾を唱え始め、世間で大きな反響を呼んだ。代表的なものは、文化啓蒙誌である『明六雑誌』を創刊した森有礼と『明六雑誌』や『学問のすすめ』において廃妾を主張した福沢諭吉である。森有礼の「妻妾論」をきっかけに、『明六雑誌』だけではなく、ほかの新聞や雑誌にも妾の存廃をめぐる、論争がおり、世論の形成に大きな役割を果たした。当時の論議の様子を見てみよう。

妾の存廃をめぐるには、森有礼を代表とする急進的な廃妾派、福沢諭吉や阪谷素を代表とする漸進的な廃妾派、存妾派という三つの意見に分けられていた。以下、この三つの意見を簡単にまとめたい。

森有礼は『明六雑誌』で「妻妾論」一から五を發表し、夫婦対等、文明国家を作るという見地から妾制度を批判し、一夫一妻を主張した。森から見れば、夫婦互いに貞操義務を負うべきであるのに、男性一人が数人の女性をおくのは「犬豚牛馬」のような行為であった。風俗を害し、開明を妨げる妾制度がまだ存在するため、日本の「人倫の大本いまだ立たざる」と批判したのである。また、「妻妾論五」では、一夫一妻を目指し、具体的な婚姻律案を提出し、急進的な廃妾を主張した。²⁷

福沢諭吉は『学問のすすめ』八編と「男女同数論」で妾制度を厳しく批判した。福沢は男女の数がほぼ同じため、一夫に2、3人の婦人を娶るのは天理に背き、禽獣といっても妨げないという考えを示した。また、妾をおくことは「一家の風俗を乱して、子孫の教育を害し」、妻妾同居の家は「畜類の小屋」と批判した。しかし、福沢は森有礼のように、すぐに法律上で廃妾を主張したのではなく、まず人々に妾をおくことを恥と感じさせ、自ら禁じるやり方を説いた。²⁸

しかし、妾制度が日本の伝統であるとか、廃妾になると皇統の継続も問題になるとかの立場から、廃妾に反対する人もいた。そこから、阪谷素のように、妾制度を批判しつつも、妾を一人だけ認め、皇族も妾をおくのを認めるという折衷案が現れた。しかし、当時、世論の方向はやはり廃妾だったといえよう。小山静子氏の統計によると、当時新聞に載せられた妾論議の中で、廃妾が約8割、存妾が約1割、はっきりしないのが約1割であったという。(小山1998、276-303頁)

小山氏によると、廃妾派はほぼ下層の士族であり、存妾派は同じ士族でも妾を所有できる上層階級や華族であったという。宮島誠一郎は元下層の士族であり、明治政府の官僚でもあった。政府の立場

²⁷ 森有礼1874、1875参照。

²⁸ 福沢諭吉2002、1875参照。

からも、西欧諸国と対等となれるように、政府にとって不都合な妾制度に反対したということはある。しかし、存妾派が大多数を占める華族に属した大河内が、一夫一妻の思想を受け入れた原因は何であったのか。もちろん、当時盛んであった妾議論の影響を大きく受けていたと考えられる。そのほか、大河内は幕末からすでに、西洋のことを学び、西洋人と交際した。したがって、少なからず西洋の影響を受けていたと考えられる。このように大河内は華族でありながら、西洋文明を学ぶことを通じて、一夫一妻制度を受け入れていったのであろう。

本章では、黄遵憲と大河内や宮島との間の妾に対する考え方の違いを簡単にまとめた。その違いは一般の中国人と日本人の間に存在していたと思われる。廃妾は日本ですでに大きく宣伝されていたが、中国ではまだそうした意識を持つ人は極めて少なかったのである。

おわりに

本稿では、清国初代駐日公使館員たちが日本人と行った筆談に見える女性に関する記述への分析を通じて、沈文熒と黄遵憲の日本人女性に対する認識と、そこから見えてくる当時の中国人女性の姿に迫り、日中知識人男性の女性観の相違を考察した。

筆談には、女性の話がよくのぼった。特に沈文熒と黄遵憲はよく日本人女性のことについて日本人と談じている。沈文熒が筆談に記した公使館に招いた日本人女性に対する不満を沈文熒が詩集『紅豆蔻軒薄倖詩』に描いた女性たちと照らし合わせることによって、沈文熒は上品で学問に通じて、金品より情を重んじるような女性を理想としていることが分かった。黄遵憲と宮島誠一郎が交わした筆談から見れば、黄遵憲の理想的な女性像は、外見と関係なく、教養があり、自らと精神的な交流のできるような女性だということが明らかとなった。

黄遵憲はそのような女性が日本ではおよそ士族の家にいることを知っていて、士族の娘を妾として娶りたかったのである。しかし、当時の中国では一般に士大夫の娘は妻と尊卑の礼が異なる妾にはならない。なぜ、黄遵憲は中国では許されないにもかかわらず、中国の士大夫に相当する日本の士族の娘を妾にしようとしたのだろうか。その理由は以下の二点が考えられる。第一に、黄遵憲は宮島誠一郎に「ただ南方には、「二妻（二人の妻）」ということがあって、その尊卑の礼はあまり異なるないので、士大夫のむすめでもできます。」²⁹と述べている。すなわち、黄遵憲は中国の南方では、「二妻」と言われるように、妾と妻との地位に大きな差がないことを主張し、日本の士族の娘を妾にすることが決して不当ではないと論じたのである。第二に、日本に赴任してから、前述したように、黄遵憲は公使館の中で副公使よりも存在感が大きく、日本の華族や明治政府の官僚たちは黄遵憲を非常に尊重していた。そのため、黄遵憲は自分の地位よりすれば、士族の娘であっても妾にすることを許してもらえなかったのではないか。そのうえ、当時の黄遵憲はやはり伝統的な中国知識人同様に華夷観念に

²⁹ 劉雨珍2010、113頁参照。

とらわれていて、少し日本を見下す意識を持っていたがために、中国ではできないことを日本でならば逃げられると考えたのではあるまいか。以上は筆者の推測にすぎず、論証は不十分である。この点、今後の課題としたいと思う。

また、当時の中国人と日本人の妾に対する認識の違いも筆談に現れている。その違いは二つの側面にまとめられる。一つは、日本人より中国人のほうが妾を重く考えていたことである。大河内たちはお春やお常などを館員の妾と看做していたが、館員たちはそれを認めていなかった。中国人は妾を家族と看做したのであり、お春などのような一時的に一緒に暮らすものは妾ではなく、ただの婢にすぎないと考えていたのである。もう一つは、妾を置くことについて、日本人はすでに批判し始めていたのに対し、中国人はまだ妾制度の不合理性を意識していなかったことである。

<参考文献>

和文資料

著書

市場学而郎1917『公娼と私娼』東京地方改良研究会

大木康2006『原文で楽しむ明清文人の小品世界』集広舎

斎藤茂2000『妓女と中国文人』東方書店

さねとうけいしゅう（編訳）1964『大河内文書—明治日中文化人の交遊』平凡社

滋賀秀三1967『中国家族法の原理』創文社

実業之日本社1914『東京案内』実業之日本社

人文社編集部（編）1982『明治大正昭和 続 東京近代地図集成』人文社地図センター

陳捷2003『明治前期日中学术交流の研究—清国駐日公使館の文化活動—』汲古書院

日本歴史学会（編）1981『明治維新人名辞典』吉川弘文館

福沢諭吉2002『学問のすすめ』岩波書店

村上信彦1972『明治女性史 下巻』理論社

山川菊栄1984『武家の女性』岩波書店

脇田晴子、林玲子、永原和子 1988『日本女性史』吉川弘文館

論文

小山静子1998「明治啓蒙期の妾論議と廃妾の実現」（石崎昇子、桜井由幾編『性と身体』吉川弘文館）

阪谷素1875「妾説の疑」（のち山室信一、中野目徹校注2009所収）

さねとうけいしゅう1947-8「おうこうち・てるな」（『中国文学』101・102・104号）

張偉雄1998「明治初年日中文化人交流の一側面—筆談に表わした「風流逸話」考—」（『札幌大学総合論叢』第2号）

張偉雄2004「明治期日中文化人の「修身治国」—論宮島誠一郎と清国公使団員との筆談考（一）—」（『札幌大学総合論叢』第10号）

幌大学総合論叢』第17号)

張穎2002「近世の中国社会における儒教的論理道德と妻妾関係」(『人間文化学研究集録』第11号)

福沢諭吉1875「男女同数論」(山室信一、中野目徹校注2009所収)

森有礼1874-5「妻妾論」(山室信一、中野目徹校注1999所収)

山室信一、中野目徹(校注)1999・2008・2009『明六雑誌(上)(中)(下)』岩波書店

中文資料

著書

陳錚(編)2005『黃遵憲全集』中華書局

姜躍濱1991『中国妻妾』河北人民出版社

劉雨珍(編)2010『清代首屆駐日公使館員筆談資料匯編』天津人民出版社

王韜1985『淞濱瑣話』(筆記小説大觀:1編第3冊)新興書局

伊原沢周2003『從筆談外交到以史為鑒』中華書局

鄭海麟2006『黃遵憲伝』中華書局

論文

郭松義1996「清代的納妾制度」(中央研究院近代史研究所編『近代中国婦女研究』第4期)

孫瑜2007「論蓄妾制及妾的社会地位—以明清時期例」(『安徽文学』第12期)

張振国2009「王韜小説集中部分作品著作權質疑」(『南京師範大学文学院学報』第4期)

